

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

特集

いま、倉橋と出会う2

「まめやかさ」

2
2010



環境教育実践

～ 未来へのとびら～

大澤 カ/監修 栄光学園・岡田勝彦/著

自然に感謝し、地球を守る人づくり

子どもを取り巻く環境に、幼児教育の答えがあります。自然や人、社会とつながり、共に生き・生かされている感性を育むもの、それが環境教育です。本書では、「自然・環境あそび」「エコライフ」「エコ活動」の 카테고리別に、活動案を豊富に掲載。園から家庭へ、家庭から地域へ、地域から地球へ…。地球を守る人づくりを進めましょう！

26×19cm 96ページ 定価 1,890円(税込)

10744



大澤カ 監修 栄光学園 岡田勝彦 著

未来へのとびら
環境教育実践



▲楽しい活動が満載！



▲イラストと写真でわかりやすい構成



▲10年来的環境教育実践をまとめた入門書

Contents

- はじめに
- カラー口絵 自然に感謝し、地球を守る人づくり
- 第1章 子どもから地球を変える
～地球環境問題は人づくりから～
- 第2章 自然に感謝し、地球を守る
～環境教育カリキュラム～
- 第3章 これからの環境教育
～未来へのとびらを開けよう～
- おわりに

幼児の教育

第109巻 第2号

目次

● 巻頭言 ●

保育者に求められる新しい役割

藤永 保

4

● 特集 ●

いま、倉橋と出会う 「まめやかさ」

8

うれしい保育者

立川多恵子

9

「まめやかさ」に徹する保育者の仕事

矢萩恭子

12

◆ インタビュー ◆

「まめやかさ」一人として人に応える

津守 真・津守房江

18

見えているもの

辰巳 豊

24

● 保育の創意工夫 (2) ●

昼寝から午前休息へ

前原 寛

30

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第109巻 第2号

● 保育の場で子どもの発達を支える(1) ●

障害をもつ子どもの育ち 大村禮子

34

● 教育学者のあたふた子育て・親育ち(1) ●

母として保育者の専門性を考える(1) 佐久間亜紀

40

● 「幼児の教育」ネット公開に寄せて(14) ●

「日記」をキーワードとして 藤枝充子

46

● 保育の現場から ●

小さな園の歩みから 飯利美知子

52

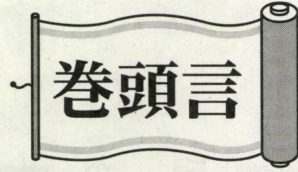
● お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(38) ●

保育学会自主シンポジウム

「女子大における総合的保育者養成の試み」

を振り返って(1) 菊地知子

58



巻頭言

保育者に求められる新しい役割

藤永 保

「気になる子」は、いまや保育界の流行語の一つになりつつあります。それは、これまで目立たなかった問題が、現在、子どもの中に広がりつつあることの証しといえましょう。

もつとも、この言葉自体は日常語であり、術語のように厳密に定義されているわけではありません。気になる子をテーマにした本も何冊か見受けられますが、著者によつて内容にはかなりのズレがあります。しかし、現在の子どもの問題の焦点の一つ、発達障害（自閉症・学習障害・ADHDなど）を主役に据えているものが多いようです。

発達障害が気になることに異論はありませんが、気になる事柄のあり方はもつと広く、人によつてもいろいろ違いがあるでしょう。まして、問題や兆候が障害と呼



ばれるほど誰の目にもはっきりするようになれば、それはもう、たんに「気になる」ことの範囲は超えてしまっているといえましょう。気になる子の本体は、むしろもつとあいまいで微少な見えにくい兆候にあると考えます。

言い換えると、一見何のつまりきもないように見えるけれども、長く見ていると問題の所在が浮き上がってくる子、あるいは、一つひとつは微少に見えても兆候の総体をまとめてみると問題点がはっきりする子、私は「気になる子」をそう考えたいと思つています。抽象的な説明ではもの足りないのです、ある保育園での実例を述べてみましょう。

六歳になろうとする女兒、以前でもりのため、母親と面談したことがあります。多少厳しい感じで、特に知的教育にこだわり、早くからこの子を幾つかの塾や教室に通わせていたようです。父親は、反対に焦らなくともという意見ですが、育児方針ではいつも母親に押し切られているらしいこともわかりました。話し合いの末、熱心はよいが、あまりストレスにならない程度にということ、以後、どちらも収まっていきました。ひと安心と思つていたのですが、その後も理由のはっきりしない欠席が多いという報告を受けていました。

この子に、またやっかいな問題が起こってきました。どうも元気がなく、欠席はさらに増えた。仲良しの友達とも何かよそよそしい。そのうえ、昼寝の時間に必ずといってよいほどおねしょをする。もともと排泄のしつけは遅いほうで、それでも



ようやく半年ほど前からできるようになっていたのに、また後戻りしてしまったというのです。

こうした退行が起くるのは、格別珍しいことではないのはご承知のとおりで、多くは、下に弟や妹などが生まれるためです。この子の場合、そんな事情はありません。やはり、親との面談が必要かというので担当保育者が母親に声をかけたところ、意外なことに、家では昼も夜も排泄の失敗はないと、母親自身が驚いていたという報告です。おねしょは、保育園での昼寝の時間に限りみられることだったので。

なぜ、こんな奇妙な問題が起くるのか、それがわかるには複雑な事情説明が必要でしたが、この小論で委細を尽くすことはできません。ようやく、この子は保育園でとりわけ訴えたいことがあるという結論に落ち着きました。それは、「お母さんは私の将来を勝手に決めてしまい、私やお父さんの希望や意見を無視している。おばあちゃんも味方につけてそれが私のためというけれど、私は普通の学校に行きたい。保育園では、友達はみな地域の小学校に行く。そのことに、迷いや恐れをもつ人は誰もいない。とてもうらやましい。保育園の先生なら、わかってくれるかもしれない。私の迷いを聞いてほしい」、およそこのようなことでしょう。

推論の要点は、母親が、これからの国際化時代、英語に習熟させるためにこの子をアメリカン・スクールに入れようと考え、英語塾通いをいつそう強化したが、本人は自信がなく望んでもいない。それでも母親に反抗する元気はない。父親はただ



おろおろするばかり。保育者たちといろいろ検討した末に浮かび上がったのはこんな状況でした。おねしよは、無用な悩みのない友達がうらやましい、悩みと無縁だった昔に返りたい、そういう退行願望の現れと解釈されるでしょう。

子どもの行動は、一見不可解であっても、いやそうであればあるほど、口に出せない心情の表現なのだと考えねばなりません。子どもの奇妙な行動を心に鬱積している事柄を表す信号として理解し、もの言えぬ弱い子どもの成長を手助けする足がかりをつくる、これは保育者の新しい役割として、大きく注目されてよいものと考ええます。

もちろん、そんなことはもうよくわかっている、あるいは、こうした奇妙な兆候は子どもの弱さに主因がある、などなどさまざまな批判はあるかもしれませんが。しかし、ここではじめに「気になる子」が流行語になっていると述べたことを思い返してください。もの言わぬ弱い子の急増は、現代の子育てに警鐘を鳴らしているようです。

「気になる子」とは何か、なぜ流行するのか、それが大きな問題です。この問題を考えるために、昨年、私はフレイベル館から『気になる子』にどう向き合うかを刊行しました。舌足らずの点は、どうぞこの本を参照してくださいれば幸いです。

(お茶の水女子大学名誉教授)



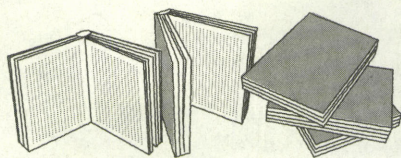
いま、倉橋と出会う

倉橋惣三（一八八二—一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問いつつ機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

生える力、伸びる力。それに驚く心がなくては、自然も子どもも、ほんとうには分からない。が、驚きだけでは、詩と研究とが生まれても、教育にはならない。教育者は詠嘆者たるだけではないからである。子どもの力に絶えず驚きながら、その詠嘆のひまもすきもない程に、こまかい心づかいに忙しいのが教育であり、教育者である。

教育のめざすところは大きい。教育者の希望は遠い。しかし、其の日々の仕事はこまごと極めて手近なことである。丁度、園芸の目的は花にあり果実にありながら、園丁の仕事があの通りなのと同じである。よき園芸家とは、まめな人である。実際に行き届く人である。休む間もない気くばりに、目と手と足の絶えず働いている人である。やがて咲かせたい花のことも、熟させたい果実のことも、手をあけて思う間もない程に、目の前の世話に忠実な人である。驚く心がそのまますぐ実際のまめやかさになる人、そういう人が実際教育者である。

まめやかさ



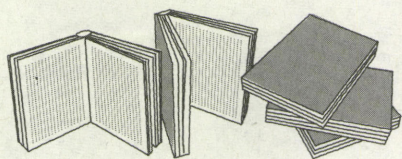
うれしい保育者

立川多恵子

長年幼児教育を研究する立場にあった筆者は、しばしば「倉橋先生が現存していたら、この問題について、どう答えられるだろうか」と、考えてみることはありません。そこで今回は「いま、倉橋と出会う」という編集部の企画にのって、改めて倉橋惣三との出会いを楽しもうと思います。

選んだ本は『育ての心』。これは先生が東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）附属幼稚園の主事として勤務していた時代に出版したものです。著者が序文で述べているように、この本は先生自身が子どもや母親たちと接しながら、その実際と実践のままに即して書いた実感の書です。

共感しながら読み進めることができました。しかしその一文、一語について、立ち止まって、行間に広がる言葉の意味を考えてみると、奥行きの高さを感じます。『育ての心』は、編集にも工夫がこらされています。今回選んだ「まめやかさ」という文の前頁には「驚く心」と題した文が掲載されています。「おや、この子に、こんな力があつ、あの子に、そんな力が。驚く人であることに於て、教育者は詩人と同じだ」と。

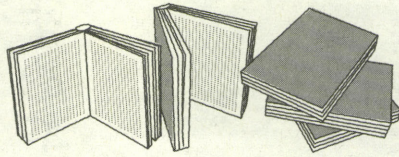


そこでまず「驚きながら教育する」ということは、どういうことか、具体的場面で考えてみることにしました。

A幼稚園を訪問した時のことです。ニワトリ小屋の前で「赤いの、赤いの」とつぶやいている子がいました。見ると、入園以来緘黙^{かえり}で、みんなが心配していたS子が雄鶏を指しています。傍らにいた担任は、寄り添って「赤いの、赤いの」と繰り返し、しばらくS子と一緒にニワトリを見ていましたが、ほかの子の世話をするため立ち上がりました。話さない子どもが初めて言葉を発した。担任も驚いたでしょう。それでも担任は静かにその子に寄り添って、小さな声で「赤いの、赤いの」という共感の言葉を発しました。そしてほかの子のところへ……。

保育現場には複数の子どもがいて、保育者はその子たちの世話に追われるのが現実です。しかし、一人ひとりの子どもとの瞬間の出会いは大切です。具体的にどんなかわり方が適切かは、子どもの状態によって異なります。それを瞬間的に判断して動くことがうれしい保育者なのです。必ずしも模範的な対応が求められているわけではありません。外側から見て、失敗と思われるような働きかけでも、子どもと出会う機会になれば、大いに意味があります。その積み重ねが子どもを育てることにつながるからです。

保育現場で子どもとの出会いを生かして動く、それは子どもと、保育者の関係を深めるためにも、そして、子どもの安定感を保障するためにも重要なことです。筆者



は、そのことが一人ひとりの子どもを育てる「教育の核」になるのではないかと考えています。

保育者が驚きながら保育できることは、うれしいことです。しかしそのために立ち止まることができないことも多いのです。保育現場では驚きの感情をエネルギーに変えて、即、行動に移すことが必要になります。『育ての心』では、まめやかさの文の次ページに「こころもち」と題して、「子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である」と述べています。

教育者はいつも、子どもの気持ちに忠実に対応する努力が必要です。それが「まめやかさ」なのです。難しいことです。教育という仕事に教育者の自己変革が必要とされるのはそのためです。

『育ての心』の初版本は、昭和十一年に出版されています。再版されたのは、昭和二十二年であり、敗戦の年です。さすがの倉橋惣三も当時とは全く異なった国情の下に書かれたものであるとして、大分躊躇ちゅうちゅうしたようですが、編集者に勧められ、育つものへの久遠の信仰による光明の伝達にはかならないと考えて、子どもたちのためにと再版に踏み切りました。あれから六十五年経ちましたが、『育ての心』はこれからも語りつがれるでしょう。それは倉橋保育の根源に人間教育の原点をおさえた教育理論があるからです。

(元十文字学園女子短期大学教授)

「まめやかさ」に徹する保育者の仕事

矢萩恭子

保育者になりたてのころ

実際に保育の場に身を置いてみて驚いたことは、まず、その想像以上の激務であった。養成校の教員となつてから、保育者をめざす学生たちに何度も白状してきたことだが、当時の自分は、とにかく最初の二年を無事に越すことを目標に過ごしていた。園生活に入った途端、元来それほど病弱ではなかったはずの自分の健康が全くコントロールできなくなつた。しょっちゅう風邪を引き、だいたい治つたかと思つても、咳だけがいつまでも続いて、緊張を要す

る場面になると発作のように咳が出た。「三年目もこのままの状態が続くようなら自分は保育者には向かないということに違いない」と、覚悟を決めて三年目の春を迎えたことを思い出す。

激務といつても、肉体労働ばかりでなく、めまぐるしく動かしている意識の精神的緊張からくる疲れもあった。朝の保育室の準備から、園バスへの添乗業務、戻るとそのまますぐに保育に入り、子どもたちの降園まで一瞬たりともものんびりと腰を降ろしてゐるような余裕はなく、降園後は、再び園バスの添乗か、保育室や園舎・園庭の清掃、保護者との個別

連絡、打ち合わせや反省・会議、園内の業務分掌に
 応じた係の仕事などが続く。やっと自分の保育室へ
 戻ってその日の保育の名残を一つひとつ手にとって
 確かめ、明日の保育へつなげるための教材や環境の
 準備に入ることができるのは、夕方遅くであるのが
 常であった。これが、行事を控えていれば、さらに
 時間は遅くなった。

ようやく自分の保育室へ戻ると、身内に残る身体
 感覚を頼りに、夢中で過ごした保育中の記憶一つひ
 とつを心に呼び覚まして保育室のあちらこちらに目
 をやり、順番に子どもたちに思いを戻していく。こ
 うして再びその日の子どもたちと対面できる時間は、
 全身を覆う疲労感にも負けず、楽しく濃厚なひとと
 きでもあったが、そうするゆとりがもてたのはまだ
 しばらく先のことであった。

先輩保育者からの助言

周囲への視野を忘れず、常に「こちらとあちら」

「今とその先」「この子と全体」に気を配り、次々と
 切れ目なく流れていく保育の一日は、慣れないうち
 は決して滑らかなには流れず、職員室との無駄な往復
 や、保育室と園庭との不必要な移動や、反対に必要
 な場所や場面に的確に位置できない不在や時間的空
 白を含み込みながら、不器用に流れていった。

「あなたは動きすぎる」——それは、一方的な批判で
 はなく、もう少し子どもの動きや表情に目を留め、
 子どもとのやりとりを楽しんで過ごすようにという
 助言であったのだが——この先輩保育者の言葉が痛い
 ほど身に染みながら、一方で、三歳児の中でも特に
 動きや要求の激しい人たちに振り回され、他方で、
 全体を把握しなければという焦りに突き動かされ、
 心身に力が入り過ぎていたことからくる疲労感も大
 きかった。

しかし、別の先輩保育者からは、こまねズミのよ
 うに動き回り、三歳児の世話をする個々の動作の一
 つひとつが決して無駄な行為ではないことを教えら

れた。たとえば、投げ出された靴をその都度そろえておくことや、小さな足に左右の靴下を探してきて履かせること、園に慣れるまではそれこそ一回一回トイレに付き添い、ペーパーの取り方から水の流し方、手の洗いや、ハンカチの取り出し方を手伝うこと、泥で汚れた足を外の流し脇のタライできれいにし、用意しておいた足拭きマットへ促したり、抱きかかえたりすること、流れ出ている鼻水を拭くこと、

砂場遊びの際に袖口をまくること、散乱したおもちゃや使わずに打ちやられた遊具を、その都度端に寄せたり、片づけたりすること、子どもたちの活動状況に応じて材料や用具を用意し直すこと……などなど、いまその時、目の前にあることに一つひとつついでいねいに向き合い、対応していくことで保育者の一日は明け暮れる。

「今日は天気がいよいよか、子どもたちは陽光に誘われ、次々と園庭に出て行つては砂場を訪れ、土や水や風と心ゆくまで戯れている」というような時で

も、その先にある昼食、その前における着替え、そのための環境準備、それらに伴う時間的流れの予測へと意識を向け、他方では、室内に残り、自分自身を求める活動にたどり着くまでの「模索の時間」あるいは、「過程としての時間」を過ごしている人、気持ち安定するまで時間がかかっている人などに細やかに配慮したり、かかわったりする。

「驚く心」と「まめやかさ」

倉橋惣三は、『育ての心』^{注2}において、適当な環境のもと、その子らしく伸びていこうとする力がさまざまに発揮される様相を感じとる大人側の心を「驚く心」と呼ぶ。子どもを理解する上で欠かせないこの「驚く心」とは、子どものすぐ傍らにいて、その子らしさやそのよさを敏感に感じとり、ありのままに感動し、受け止める心の動きであろう。しかしまた、この「驚く心」をもってしても、日々のこまごまとした仕事に誠実に向かう保育者の細かい心遣

い、行き届いた実際のな気配りである「まめやかさ」なくしては、「教育」にはならないという。つまり、子ども理解は、感受することに留まるだけでは理解とは呼べず、受け止め、感じとったその先を見通して、いま目の前のこの子どもに対して、具体的な実的な手立てを施すことができて初めて、子ども理解と呼べるということではなからうか。

確かに、着替えを手伝ったり、お弁当のしたくや帰りの身じたくを見たりする一つひとつにおいて、保育者の個々の子どもに対するとらえ方が、微妙に反映されていく。どの子どもにも一見同じような援助やかかわりがなされているように見えても、実はその具体においては、働きかけるタイミング、援助と援助の間の取り方や声のかけ方、距離の置き方、全体の中での順番等々に対して働いている保育者の意識があり、意図がある。そして同時に、このように、身体に触れ、視線を交わし、言葉をかけるといふ毎日毎日の営みを通じて、無数に積み重ねられる

やりとりの中から、子どもと保育者相互に情動的で精神的な結びつきを成り立たせずにはおかない関係性の絆が燃り上げられていくのである。これを、単純に「信頼関係」と呼んでしまうには空疎な感が漂うほどであり、それは簡単に有無を問えるようなものではなく、互いに「いつの間にか」相手の存在が、かけがえのないものになっていく関係である。周知のように倉橋は、この保育者の「教育」の仕事を図芸における園丁の働きに例えている。子どもを元来、自分自身で伸びていく力をもっている自然の種子とぞらえて、それに花や実をもたらすために、「うるおい」を与え、自然に逆らわず、成長を強制・矯正せず、一つの花も枯らすことなく、ために「限りない心づくし」^{注3}を実践するのが園丁（教育）の仕事である。言うまでもなく、幼稚園の創始者であるF. フレーベルが栽培の原理を教育の原理とし、その名称を、「庭」のイメージから「幼稚園」としてブランドンケンブルグに開いた考えに所以する。^{注4}

「まめやかさ」に見る養護と教育の不分離

ところで、「まめやかさ」の具体的内容を考える時に思い浮かぶことは、『保育所保育指針』で保育所保育の特性であるとされる「養護と教育」という考え方である。平成二十年三月に改定告示された指針^註の第三章「保育の内容」では、「子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わり」である養護と、「子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助」である教育が、「子どもの生活や遊びを通して相互に関連を持ちながら、総合的に展開される」こと、すなわち「養護と教育が一体となって展開される」ことに留意する点が明確に強調されている。この子どもの健康や安全、安定にかかわる内容を実践するために、保育者がこまごまと絶えず心がけることこそ「まめやかさ」の具体的内容であり、同時に、五領域から構成される「教育に関わるねらい及

び内容」を実践する上でも「まめやかさ」を具体的に発揮する必要性が、この「一体」という用語には表されている。つまり、「まめやかさ」を子どもたちの中にいる保育者の教育者としての要諦であるとした倉橋においては、すでに養護と教育との不分離が言われていたのだととらえることができるのではないだろうか。

再び、先輩保育者から

こうして、再び自身自身の幼稚園教諭時代を振り返る時、脳裏に浮かぶある保育者の姿がある。現在も現役で経験年数を重ね続けているその保育者は、決して元気に華やかに目立つ保育を行う訳ではないが、温かく穏やかな雰囲気はクラスの子どもたちを、安心し落ち着かせ、そして見事に一人ひとりに行き届いたていねいさと「まめやかさ」を体現していて、未熟な自分にとっては憧れであった。子どもたちの遊びがどんなに雑然と定まらないような条件の日で

も、あるいはどんなに遊びが大々的に広がっている時でも、保育室が物であふれていっぱいになるといふことがないのが不思議であった。それでいて保育中は、子どもたちの目の前でかいがいしく動き回っている印象がないのである。

そしてある日の保育後。夕方の日差しが入る保育室のロッカーの前で、子どもたちが残っていた作品を一つひとつ手にとって眺めながら、明らかにそれぞれの子どもと対話している光景を見た。私にしても、ロッカーの棚を雑巾で拭き、作品を整理し、並べ直すことはしていたが、忙しく流れる保育後の時間の中では、当時、このような心のゆとりも細やかな観察もなおざりになっていたことにハッとさせられた感覚を、いまでもはっきりと覚えている。そして、「行き届く」とは実際にこまごまと立ち働くことばかりではなく、このように子ども一人ひとりへ心を向ける時間をていねいに積み重ねていくことでもあるのだと学んだ。だからこそ、この先輩保育

者のクラスの眼に見える実際の姿があったのである。

「まめやかさ」について考えながら、何人かの先輩保育者のことを思い出してきたが、保育の場であれながら同僚の何とありがたいことであつたかといまさらながら気づかされた。そして、教育的営みとしての保育が、人である保育者に支えられていることを改めて考えさせられた。

(田園調布学園大学講師)

注

- 1 津守真『子ども学のはじまり』フレーベル館
一九七九年
- 2 倉橋惣三文庫3『育ての心(上)』フレーベル館
二〇〇八年
- 3 倉橋惣三『幼稚園雑草(上)』フレーベル館
二〇〇八年
- 4 フレーベル『人間の教育』有斐閣新書
一九七九年
- 5 厚生労働省『保育所保育指針 解説書』
二〇〇八年

インタビュー



「まめやかさ」

人として人に応える

津守真・房江夫妻に聞く（その2）

聞き手 江波諄子

●峻厳さと洒脱さと

津守真（以下M）倉橋先生をご自宅に訪ねると、先生はいつも和服でした。私はご自宅で会ったことしかない。大学で倉橋先生に会ったことはありません。ご自宅で会う先生は穏やかで、しかし芯のある方でした。

江波（以下E）ご自宅でどのように会われて、倉橋先生に「峻厳さ」を感じたと津守先生はおっしゃい

ますが、おうちでくつろいでいる人の良いおじいちゃんに会われるような感じではなかったのですね？

M そういう感じではなかったですね。倉橋先生は穏やかなのだけれど、峻厳さを感じさせる。私はその時の倉橋先生よりも現在はいぶ年上になっているのだけれど、そんなふうではない。本当にあのころの倉橋先生は、私から見て大人に見えました。武士道的な、そういう厳肅なところ。それは僕だけでなく、ほかの方もそういう印象をもったのではない

かと思えます。

E やはり実際にお会いしていないとわからないですね。そのころ学生だったり、あるいは現場で保育をされていたりした方々からうかがったお話だけで想像したのとも異なりますし。

M しかし一方で、倉橋先生はとても洒脱でくだけたところもある方なんです。

津守房江（以下F） 歌舞伎もお好きで、附属幼稚園の先生を引き連れて、よく歌舞伎にも行かれたみたいですね。倉橋先生の奥様から聞いたその時のお話が、すごくおもしろかったですね。情景が思い浮かぶように話す、チャキチャキの江戸っ子の語りです。

M たくさんあって全部は思い出せないけれど、本当におもしろかった。及川先生^{註1}などは、倉橋先生のそんな面もご存じなのですよ。

E 倉橋先生と津守先生との年齢が四十四歳違うん

ですよ。その間に幼稚園の先生としての教え子はいろいろな方がいらつしやいましたけれど、学問として保育に向き合ってきた人は少なかったのではないかと思うのです。ですから、倉橋先生にすれば、これから同じ学問の道を進む若い同志、ご自分から四十四年ぶりの学生に向かい合うという出会いだったのではないかと思えます。

M 最初に出会った時から倉橋先生は、武士道的峻厳さ、真に光るものを感じさせる人でした。「心理学者・倉橋」ではない、「人間・倉橋」に出会った、ということだろうと思います。

F 人間が大好きな、人間研究者倉橋、ということかと思うのだけれど。

●一人の人間として互いに会う

E 倉橋先生のような方と出会う時というのは、大きな感化を受ける、ということが一般的に想像され

ますが、津守先生の場合はどうだったのでしょうか。やはり津守先生の中にはすでに、無意識のうちに、一人の人間としての出会いを大事にというような思いがあったのでしょうか。

M 一人の人間として出会うというのが、先にお話ししたように、一番初めから、それはしっかりと私の中にあつた。倉橋先生には初めて会つた時から、この人は信頼できる人だと感じました。これもまた不遜な言い方かもしれないけれど、倉橋先生もそう感じられたのではないかと思います。

F 不遜というのも、ある意味、本当だと思つてですね。若くして、意気盛ん、あくまでも自分は自分として、人に取り込まれてしまわないでやっていこうとする、という意味での不遜。上の人の理論にだけくつついていこうとする、というのではなく、自分では自分でいこうとする気持ちで津守には非常に強くあつたように思います。

M 先ほど来、読んでいる日記の、昭和二十四年五月二十一日土曜日。このころ僕は倉橋先生の家に、一度ならず二度三度行つて居るのですよ。行つた時に起こつたことや様子をいちいち書いて居るわけではないのだけれど……。この日、初めてお訪ねした時のことを次のように書いています。

「子どもの世界に生き、その中で呼吸をする気持ち。わたしはそれをこのうえなく珍重し、尊敬する。人間と人間の社会とを客観的に科学的にみていく道、それをわたしは進みたいと思う。今はもう、わたしは大きなことは言うまいと思う。現実のこの世界をできるだけよく生きていくことを考えよう。ひとは現実を最善に生きることを考えるのが一番良さそうだ。どんなに高尚な理想もそれを抜いては意味がなさそうだ」(日記からの引用)。

倉橋先生のところから戻つてきてから、こういうふうな、自分勝手な抽象的なことを書くんですよ。

もっと現実のね、先生と会った時のことを書いておけばよかったものを、僕の悪い癖でね、こんなことを書いてあるわけですね。

F あくまでも自分として向き合う、ということなんでしょうね。取り込まれてしまうのでなく。倉橋先生の言葉にうっとりとして、倉橋先生にくっついてそれでやっていこう、というようなことではないのです。

●まめに動く保育者

E その後、津守先生はアメリカに行かれますね。

M ちょうどそのころ私は、Child welfare という言葉を知っていたんですよ。わたしは○田図書館に通い詰め、A.ゲゼル^{註4}などアメリカからの新着の本を読みあさっていました。

E では、すでにそのころのアメリカ児童心理学会がどんな感じかというのをご存じだったのですか。

M 知っていました。それで、アメリカに行ってみたいという気持ちはずっともっていましたね。

E ゲゼルが影響を受けたスタンレー・ホール^{註5}は「子どもを知り、愛し、子どもに奉仕することはもっとも崇高な人生活動である」という言葉を語ったようです。また、倉橋先生は「教育は育つ者に対する久遠の信仰である」とおっしゃり、この言葉も同様に、保育の奥深さを語っているように思います。それからもう一つ、倉橋先生に代表される教育におけるロマン主義というのが、いま一つわからなかったのですが、津守先生がどこかで、「教育におけるロマン主義者というのは、明日この世が終わるかもしれないとも、明日に希望をもって、子どものそばに居続ける人だ」とおっしゃいました。津守先生のこの言葉を聞いて初めて、よく言われる児童中心主義とかロマン主義というものが、具体的な実践者の行為として、自分なりにわかったような気がしました。こ

これらの名言は、いまの若い学生とも充分分かち合えます。倉橋先生が学ばれた当時の心理学は、いまの心理学とはずいぶん違っていたのでしょうか。

M いままでいう科学的心理学ではないですね。倉橋先生の指導教官の元良勇次郎先生は、理論家でしたが、幼児のことをやろうとする倉橋先生に対し、とても寛容で理解があつたようです。私の指導教官の高木貞二先生は、厳密な方法論を考えて強調し、講義していました。文学部心理学は、ずっと哲学の範疇はんちゆうでした。

E 当時の心理学科は哲学を基盤に、そうやって心理とか保育をやっておられたと思うのですが、その後何十年も経つと哲学と心理学というのは距離ができてきますよね。先ほど先生の日記にありましたように哲学をもちつつ、客観的科学的に人間を見ていくというあたりが、その後、狭いとらえ方になつていったといえるのでしょうか。

M そのような狭い、客観的、科学的ということでは保育はとらえきれない。その子が何を求め、何を欲しているか、それに応えるにはどうすればよいか。理屈や理論を考えることは置いておいて、人間として、できるだけ素直に、子どもに応答しなければならぬのです。

E 倉橋先生は、驚く心そのまますぐに実際のまめやかさになる人、そういう人が実践教育者であるといっていますか……。

F 「まめに」、という言葉葉を、このごろの人はきつとあまりつかわないでしょうけれど、実際の保育者は、心も体もまめに動きますね。骨惜しみをせず。M その子が怖がつたりしないよう、人間として子どもに応答するために、大人の側に、まめに動くエネルギーが必要ですね。あらかじめ決めておいて、考えておいて動くことも必要かもしれないが、まめに動く中で、新たな考えが思い浮かぶこともあるで

しょう。立場が違っていろいろな人が子どもにかかわって、お互いに元氣を出し合い、励まし合う。私もいつの間にか倉橋先生の年齢を超えて久しくなりましたが、保育の中で大切にしてきたことは、子どもの側に立って考えることで、そのことは何十年たとうが変わりません。

〈インタビューを終えて 江波諄子〉

本当に密度の濃い一日でした。子どもの自主性を大事にされた倉橋先生が、実は子どもにも大人にも、人間としての自主性・主体性を大変重んじられていたということがわかりました。また熟年の倉橋先生が若き学徒津守先生を温かく迎え入れ、その青年に託した配慮や期待感が浮き彫りにされたように感じます。保育学はまだまだ認知度が低く、この道を歩もうと決意した若者への、年長者の悦びと心配りは、もう一つの「育ての心」のように思えます。

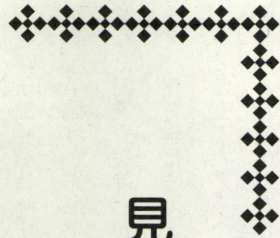
津守真・津守房江(保育研究者)／江波諄子(常磐大学)

記録：山下紗織(お茶大大学院生)

構成：菊地知子(お茶大幼児プロジェクト)

注

- 1 東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)附属幼稚園保母、お茶の水女子大学附属幼稚園園長
- 2 津守真「わたしが幼児教育を志したころ」
〔「幼児の教育」第九十八巻第十一号から第一〇〇巻第十二号に連載〕を参照
- 3 戦後アメリカの「民間情報教育局」のことで、日本の民主化を進めるために全国各地に図書館をつくり、アメリカの英文図書や定期刊行物が一般市民に開放された。その後、ACC(アメリカ文化センター)、さらにAC(アメリカンセンター)となる。
- 4 アメリカの心理学者、小児科医。子どもの発達研究分野のバイオニアとされる。一八八〇～一九六一
- 5 アメリカの心理学創設期の心理学者
- 6 日本最初の心理学者
- 7 実験・動物心理学者



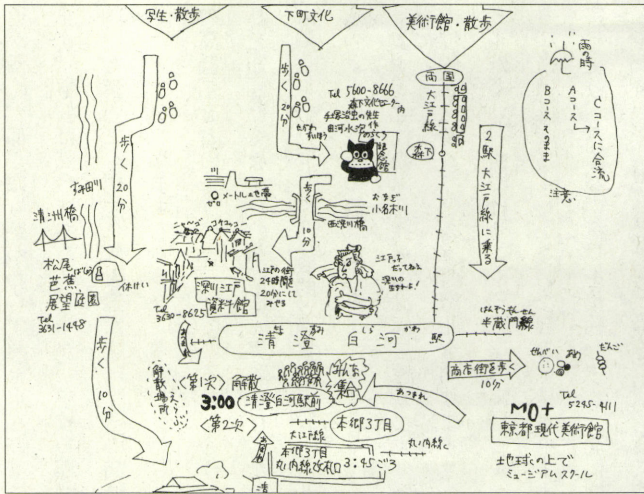
見えているもの

辰巳 豊

筆者は幼児教育が専門ではなく、小学校の学級担任です。ここでは子どもたちと日ごろ接している中で感じていることを記すこととします。

突然ですが、今度遠足へ行くということが決まりました。教員仲間で打ち合わせをするという状況を想像してください。いつのころからか、あることに気づきました。駅からこう行つて、ああ行つてという話し合いをしますが、どうも話のとおりが悪いのです。そこで私が図解して示します。簡単なイラストマップ

を描く訳です。そうするとなるほど、そのコースがいいというように、初めて話し合いの舞台に乗ることができるので。何度かこういうことを重ねるうちに、ある推論に達しました。人間には、二種類あって自分がいま考えていることがイメージとして脳の中のスクリーンに投影されている人と、そうでない人がいるのではないか。ちよつと大胆な、そして乱暴な見解のようですが、思い返すとそういったことってあるのではないのでしょうか。遠足のプリント



▲遠足の行程を図示した案内プリント（部分）

を書くのは私の役目というのが常となっております。その号ばかりは、ワープロ打ちではなく、手描きのイラスト入りです。計画全体をビジュアルにとらえたほうがわかりやすいと思うからです。

こんなことがきつっかけて、筆者は人間が脳の中で描くイメージというものに興味をもちました。これから、紹介するのは、小学校三年生の社会科の授業で行った「学校のまわり調べ」の実践です。

社会科の授業は、いまでは低学年では生活科という教科に統合されています。低学年では自分や家族のことに関心をもつことから始まり、学校生活のことへと学習の対象が広がっていきます。そして、三年生になると社会科という教科に分化し、学校の周りに目を向けます。それから自分の住む地域や県、やがて国へと広がっていくわけです。「学校のまわり調べ」は、調べ学習の一つに位置づけられているのです。

さて、小学校の調べ学習においては子どもの実感何よりも大切にされています。本などで調べた間接的な知識よりも、実際に自分の眼で見、足で歩いて感じた直接的な知識を重視します。本校は武蔵野台地の崖線の終点に当たるので、周辺には急な坂

道が多く、都心にもかかわらず湧き水も豊富にあります。学校は高台にあるのですが、学校の周囲をぐるっと歩いて一周すれば坂道だらけ。その高低差に改めて驚かされます。いったい、子どもたちは、この高低差をどのようにとらえているのだろうか。それを知りたくなったのが、この実践を行ったそもそのきっかけでした。一般的な授業の流れでいくと、次のように授業の流れは進みます。

まず、学校の周り探検の計画を練ります。屋上へ方位磁石を持っていき東西南北を知ります。北にはビルが多い、西にはサンシャインの高層ビルが見える、南は低いビルしかないなどの意見が出ます。教室に戻り、みんなの意見を集約します。北には高いビルが多いが、南には低いビルが多いのではないか。この時点ではそんな予想が出ます。次に探検で見えるべき注目を絞ります。ビルの高さに注目しようということになりました。高さをどうやって調べるとのか討論が続きます。「正確な高さの測定はできな

いけど、ビルの階数を数えればいい」という、子どもでも実行可能な方法に落ち着きました。四人が一緒になので、道の左右に分かれ、数え間違いがないようにそれぞれ二人で階を勘定し、ノートにメモを取るシステムとしました。

いよいよ探検に出発の日となりました。子どもたちの眼は好奇心でいっぱいです。急いで回れば十分ほどで学校の周囲は一周できますが、ビルの階数を数えメモを取りながらなので、たつぷり授業二時間分、それでも足りずに前後の休み時間を加えて正味百分にも及ぶ大調査です。こういう時に厄介なのは、子どもによって興味の場所や、そこでの関心の度合いが異なることです。各々のペースで思い残すことなくやらせてあげたいのですが、全体時間のペース配分や安全管理上のこと、はたまた近隣住民への迷惑などを考えると、どうしても集団で一斉行動を取らざるを得ません。そんな状況でも子どもたちは工夫しながら各々の目的を達していきます。細

はともかくとして、子どもの心に深く大きく残ったといえるでしょう。この感動を表すのに、果たして従来のようなまとめの方法が本当に適しているといえるのでしょうか。

私は、土地の高低を問題にしているので、紙に書くのではなくて、もっと立体的なやり方でまとめを試みないかと投げかけました。やはり従来のようなポスター形式でやりたいと言ったグループもありましたが、大半は私の考えに賛同してくれました。

言ってはみたものの、立体物を作るのは簡単ではありませんでした。台紙を用意し、紙粘土も用意しました。紙を折ってビルを建たせるグループもありました。平面で処理して表現する方が手間もかからずたやすいと思いますが、立体で表現する方を選んだ子どもたちは喜々として作業を進めます。鼠坂のポリウムを表現するために紙粘土が次々と投入されます。材料の用意はそれほどなかったたので、毎日のように教材屋さんへ電話をすることとなりました。

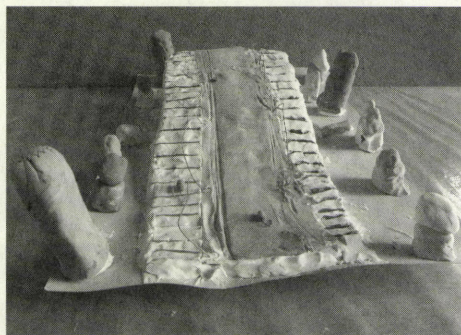
鼠坂グループ

の製作の様子を見ていて気づいたことがあります。一つは、

子どもなりにリ
アリティを追
求しようとして
いることです。

坂の勾配、手す

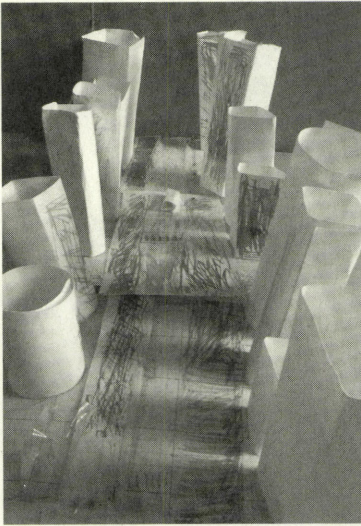
りや階段。郵便屋さんが立ち寄った家。スケールも違っているし、ディテールも不正確だけど、彼らの論理があり、あれこれ意見を言い合い、修正しながら進めています。もう一つは鼠坂にファンタジーの世界が加わっていったことです。小さな鼠たちが登場し、懸命に急坂を登っていきます。実際に自分たちの手を動かし、具体的に三次元の物を創っていく間に、さまざまな感覚が総動員されている様



▲写真1：粘土で表現した鼠坂

子をほほ笑ましく眺め楽しんでいた私でした。

続いて、こちらは紙を折りビルを建てていったグループです。ビルの形を正確に復元している訳ではありませんし、高さにも誤りがあります。しかしながら、何階のビルはこれぐらいと自分たちの感覚を頼りに高さを微調整していました。切りすぎてしまい、低くなりすぎたビルは紙を継ぎ足して高さを調整するといった具合です。大人がちよつと見ただけでは、あまりきれいにできあがっていない紙工作ぐらいにしか思えない代物ですが、彼らにとって



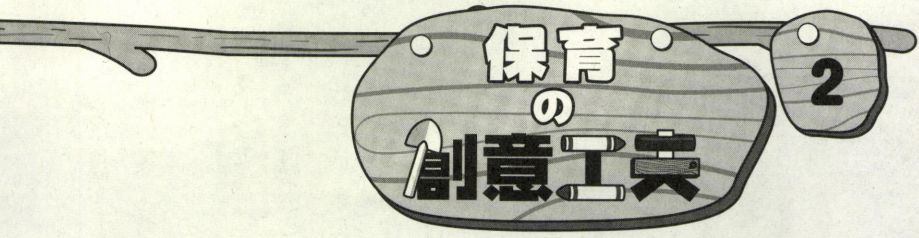
▲写真2：紙で作ったビル群

は知恵と汗の結晶なのでした。

このように見えてくると、大人が外見で判断する以上に子どもは豊かな世界をもっていることがわかります。できあがった外観では想像できないイメージの世界。それを教師はどこまで見抜いてあげられるかが勝負だと思えます。

学年が進むにつれ、表現は言語に中心が移ります。低学年の絵日記は、高学年になると絵がとれて日記となります。特に日本の教育はそういう方向性をもっているような気がします。思考を抽象化した言語というものは、それなりに緊張があり、奥行もあります。文字の配列や組み合わせだけで、さまざまな感情を表すことは大変な高度な精神作用だと認めます。しかし、ビジュアルな表現をしていくことを軽視してはいけないと考えます。絵が文字にとって代わることだけが子どもの発達ではないことを、常に心に留めていきたいと思えます。

(お茶の水女子大学附属小学校)



保育

の

創意工夫

2

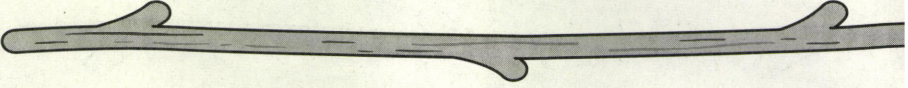
昼寝から午前休息へ

前原 寛

「子どもの生活を二十四時間にとらえる」とよく言われます。子どもは園だけで生活しているわけではなく、家庭と園の両方が生活の場です。一日の園生活を考える時、家庭との関係が重要になります。

子どもたちの朝の様子が気になり始めたのは、もう二十年以上も前のことです。ぼんやり顔で登園する子、あくびを連発する子、車の中で眠ったままの子（私の園は、ほぼ全員が保護者による自家用車送迎です）、園舎の廊下や床で横になりごろごろしている子など、気になる姿が多くなりました。また一、二歳児という小さな子どもたちは、昼前には眠たくなり、寝込んでしまっ前に食をとらせなければならぬと、保育者が追われている状態もありました。

当時、子どもの夜更かしや朝寝坊が一般的な問題になっていました。現在は

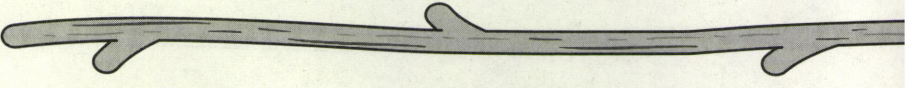


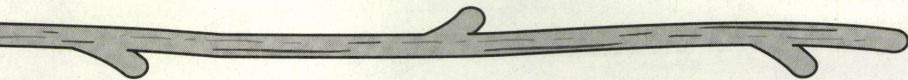
もっと深刻化していますが、当時から子どもの生活は夜型化していました。

夜型で朝寝坊の子どもは睡眠不足の状態なので、午前中の活動が緩慢になっています。では、いつの時間帯が最も活動的なのだろうか、と考えてみると、午後の昼寝の後、おやつも食べて夕方のお迎えが来るまでの時間帯が、最も活発化しています。寝不足が昼寝で解消され、おやつも食べて体調が整えられる、そして夕方が活動的になるということは、そのまま夜遅くまで起きていることにもつながります。当園は典型的な過疎地域にありますが、都会や田舎ということと関係なく、生活の夜型化は進行していました。

本来、昼寝は日中の活動の疲れをとることを目的としています。しかし、夜更かしが慢性化するにつれて、昼寝が睡眠不足を解消する手段になってしまっています。園生活の本来の枠組みである日中活動の休息としての昼寝と、子どもの実態とがねじれています。

子どもの現実在即して、園生活の枠組みをとらえ直したらどうだろうか。そこから午前休息という発想が生まれてきました。昼寝が睡眠不足を解消するのであれば、午後まで待つのではなく、午前中に昼寝を位置づけることにしたのです。午前だと昼寝という言葉がそぐわないので、休息という呼び方に変え、体を休めることに主眼を置き、結果として眠る子は眠る、ということを職員間で共通理解しました。それ以来、当園では「午前休息」と呼んでいます。





昼寝が午前休息に変わると、一日の流れも大きく変わります。
かつては、


登園—活動—昼食—昼寝—おやつ—活動—降園—であつた流れが、
登園—活動—休息—昼食—活動—おやつ—活動—降園—となります。

休息に入るのは、午前十時から十時三十分ごろですので、登園していきなり休息ではありません。しばらく活動の時間があり、それから休息になります。休息後が昼食となり、昼食後が活動の時間となります。

午前休息になつてから、子どもの姿は大きく変わりました。登園時の寝不足の緩慢な姿や、午前中の生気に薄れた状態も、ほとんど見られなくなりました。一、二歳児も睡眠をとつてから昼食になるので、ゆっくりと食事をとることができるようになっています。

午前休息の取り組みはもう二十年以上たちます。生活の組み立ての違いが明確ですので、多くの疑問や批判の対象になりました。また、この取り組みを理解してくれる人もいますが、全国的に見ても、具体的な数はわかりませんが、実践はごく少数しかありません。

よく言われる批判の代表的なものは、子どもの夜更かしが問題なのだから、家庭に働きかけて早寝早起きを励行することが大事であり、夜型生活を認めるような実践はよくないのではないか、というものです。



この批判は、筋が通っていてその通りだと思えます。しかし、筋が通る正論を唱えることで解決するでしょうか。

早寝早起きの重要性は理解されていると思えますし、保護者に対して夜型生活を勧めるような保育者がいるとは考えられません。おそらく全国の保育者が、さまざまな機会を通じて、早寝早起きの励行を保護者に伝えていると思います。当園でもそのような働きかけはしています。

しかし、夜型生活はさらに進行しています。二十年前と比較しても現在ではさらに夜更かし型になっていると思われる。保護者に働きかけても、現実の家庭生活に変化を及ぼすことは困難です。もちろん、働きかけ続けることは大事ですが、そうすれば変わると思うのは早計ではないでしょうか。

実際に午前休息を始めた時の保護者の反応の一つが、「子どもが夜早く眠るようになった」というものです。午後の活動の時間帯が早くなったので、夜に眠たくなるのも早くなったものと思われ。格段に早寝早起きになったわけではありませんが、それまでよりは夜型生活ではなくなってきたことが感じられました。そして、子どもたちから寝不足感が消え、園での活動が活発になり大きくなっていききました。

昼寝を午前休息と位置づけ直すことが、園生活全体の組み立てを大きく変えていったのです。

(鹿児島国際大学准教授・二元安良保育園園長)

◆◆◆ 保育の場で子どもの発達を支える(1) ◆◆◆

障害をもつ子どもの育ち

大村禮子

はじめに

筆者はA市の委嘱を受けて、①障害をもつ子ども、
発達が気になる子どもに対する支援 ②保護者に対
するケア ③関係機関との望ましい連携体制構築の
三つを目的とする発達支援事業「巡回相談」の相談
員として、A市内保育所六か所と幼稚園二園を継続
して年二回訪問しています。訪問先では、通常の保
育場で相談の対象となった子どもを観察し、その
後の保育者とのカンファレンスで園からの質問に答

えながら、保育所保育指針にある「子どもが現在を
最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎
を培う」ために保育の場でできることを保育者と一
緒に考えています。

行動観察からわかること

保育所や幼稚園を訪問すると、毎日子どもたちと
かわり、一人ひとりの育ちや気持ちの動きを敏感
にとらえて、保育を工夫し、何とか子どももつて
いる力を引き出してあげたいと願う保育者の熱意を

切に感じます。年二回しかない観察場面を通して、大切なことを見落とさず、その熱意に応え、相談してくる内容に満足のいくフィードバックをしていくことは大変難しいです。

筆者はこの巡回相談の仕事を始める前から、現在も継続して十年以上児童相談所で非常勤の児童心理司として、要保護家庭児童をはじめ、発達相談や療育手帳の判定に訪れる子どもたちの知能検査や発達検査、所内での個別の行動観察を行ってきました。検査を行って出される数値は、子どもの発達を理解する一つの手がかりではあり、子どもが福祉の制度上の支援を受けるためには必要ですが、同じ数値が出ても、一人ひとりの子どもの課題への対応や理解、表現の仕方はすべて異なります。緊張や不安の強い子どもが、知らない場所でさまざまな検査を受けることは、多大なストレスがかかってしまいます。そこで、検査だけでなく、個別の遊びの場面で行動観

察することで、数値に表れてこない生活上必要な力の強さや弱さがわかってきます。そして、その子どもがもつ力の強さと弱さを理解して、保育者や保護者にわかるように伝えることが大切です。

巡回の観察で見えること

巡回では、個別の行動観察と異なり、集団の保育の中で子どもを観察します。筆者は、まず①相談の対象となった子どもが発達過程のどこに位置するかを見定め、②子どものもつ力の強さや弱さを保育者や他児との集団場面でのような時にどのような形で出すのかを見ます。②では子どもが察知していると思われるその場の雰囲気、流れる空気や音、子どもたちの声などを五感で感じる一方、日々、さまざまな課題を抱えながら保育する保育者とは異なった立場から、客観的に子どもや集団を見ることで、当事者である保育者には気づきにくい園の特性、保育

環境、保育者と子どもとの関係、他児との関係などを見ています。保育者に観察して見えたことを伝え、一緒に考え、園の特性を生かして、日々の保育の中で保育者がいていねいにかかわっていくと、必ず子どもたちに成長が見られます。その成長を保育者と一緒に喜べる時、この上もない幸せを感じます。

保育者との協働

障害をもつ子どもに対する保育者の温かなまなざしとかかわりは、周囲の子どもたちのかかわりをも変えていきます。多様なニーズに応えなければならぬ保育園の中で、担当保育者がさまざまな課題を一人で抱え込むことなく、園全体でサポートしながら子どもと安定してかわられるようにすることは大切です。少し離れた別の視点から子ども自身と子どもを取り巻く環境すべてを含む保育全体を見渡し、観察から見えたことを正確に伝えていくことで、保

育者に気づきと工夫が生まれていきます。こうした取り組みの具体的な例を挙げてみましょう。

障害をもつ子どもの育ち

保育園で支えられ、一緒に生活していく中で、障害をもつ子ども周りの子どもたちも共に育つということとを教えてくれた忘れられない事例があります。

〈事例B子〉発達遅滞との診断、四歳一か月から入園。入園して一年は三歳児クラスに入る。療育手帳A所持、療育機関に入園前は月二回、入園後は月一回通い、言語聴覚士、作業療法士から三十分ずつ指導を受けている。

入園当初の発達状況について、担当保育士は「歩く時に体のバランスが悪く、不安定。段差がある所では、壁に手をつけて、上り下りする。食事の時に椅子に座ることもできず、床に座って食べ、スプーンは持つが、すくうことは難しい。箸やはさみはま

だ使用できない」と記載しています。言語理解は、身近にある物の名前もわかっていない物のほうが多く、日常の指示は理解できることもあります。言葉は「あゝあゝ」という発声のみ、指さしと身振りで意思を伝えていました。そして入園当初は担当保育士が必ずそばについて、信頼関係を築き、しだいにほかの職員や他児とのかかわりを増やしていったようです。

〈行動観察場面1 B子四歳三か月〉

入園一か月経った自由遊び時間の園庭で、B子はほかの子どもから離れた場所に一人座りこんで片手で砂をすくっては落とし、落としした砂を両手で触っている。筆者がそばにそっと寄って名前を呼ぶと、こちらを見て笑顔を見せる。筆者がそばにおいてあるカップを取って、その中に手で砂を落としてみせるとB子も手で砂をすくってカップに入れ始める。

この場面では、B子の周囲には保育士も他児もいなかったため、筆者は観察だけでなく、かかわりをとることでB子との世界を共有しました。

〈行動観察場面2 B子四歳三か月〉

給食の前に三歳児がクラスに集まり、B子は後ろの端の席に座る。担任がクラスの子どもたちに向かって話を始めるが、B子は担当保育士と筆者の姿が目に入ると、立ち上がってこちらのほうばかり見る。B子のそばにいた子が手で押さえて座らせようとしますが、いったん座ってもすぐにまた立ち上がり、ほかにも立ち上がる子、話を始める子とクラス全体がざわめく。

担当保育士とそっと観察に入りましたが、日ごろ親密にかかわってくれる担当保育士のほうにB子の注意は向かってしまいました。この二つの行動観察場面と事前に園から伝えられた情報を基に、

① B子がまだ一人で感覚遊びを楽しんでいる発達

過程にあること

②できないことをできるようにさせるのではなく、いまできることを一つずつ確実に伸ばし、遊びや生活の中で、保育者や他児が楽しそうに取り組む姿を見て、自然にまねしながら、できることを増やしていくこと

③集団全体に向けられた言葉だけでの伝達は理解することが難しく、注意がそれた時のB子の行動はほかにも刺激を受けやすい子どもの個々の行動を誘発すること

を伝えました。そして、B子が活動の内容を理解し、意欲をもって参加するためには

①B子の座る位置を保育者の行動が良く見えるような位置に固定する

②B子が安定するために、保育者の指示をしつかり理解し、ゆとりをもって活動できる子どもがB子のそばに座るように配慮する

③B子が安定するまでクラス担任とは別の担当保育士が補助としてB子のそばにつく

④伝達方法は言葉だけでなく、実物を見せる、保育者が手本となって動いて見せるなど理解しやすい方法を取り入れる

という提案をしました。

この園の良さは園長をはじめとして職員の間が良く、何事にもおおらかで、子どもに対して構えず、自然に接していることです。そのためB子のようにゆったりとマイペースでも、子どもたちがそれを受け入れる土壌が育っています。巡回でのフィードバックを受けて、園ではそれまでのいいいなかかわりに加え、日々の活動での伝達方法や座る位置を工夫し、二か月ごとに個人の期間案を作成し、個人日誌をつけて、園長、担任、担当者で話す機会を増やし、会議ではB子の様子を全職員に伝え、共通認識するように努めてくれました。さらに通っている

療育機関での作業療法士、言語聴覚士との実施内容について記載してもらい、見学して情報交換する機会をもちました。こうした園の取り組みの結果、約一年半後の巡回では、成長したB子の姿が見られました。

〈行動観察場面3 B子五歳十か月〉

給食の前にクラスで集まり、B子は保育士の手の動きや絵本がよく見える最前列の真ん中に座っている。筆者や担当保育士に気づいてニコニコ笑顔を向けるが、座ったまま担任の指人形を使ったお話にじっと目を向けている。時々周囲の子どもが笑うと、その顔を見て、一緒に楽しそうな笑顔をみせる。お話が終わると、クラス全体が落ち着いて食事の前の手洗いなど一つの流れに従って動き、B子も周囲の子どもに助けられ、食事が始まると隣の子と顔を見合わせながら楽しそうにフォークを使って一人でスパゲッティを食べる。

〈行動観察場面2〉と比べ、できることが増え、周囲の子どもと一緒にいて楽しそうです。

巡回相談はかわる人をつなく橋渡し

担当保育士の巡回初期の相談は、言葉が出るためにはどうしたらよいか、一人で食べられないために手先の訓練をしたほうがよいのかといった質問が中心で、できないことに注目し、できるようにさせたなどの思いが強く出ていました。巡回や研修を続けるうちに保育園でできることと療育機関に任せることを分け、お互いの情報交換をすることで、園内ではB子のできることに注目し、無理なく生活の場で、できることを伸ばし、楽しく過ごせる場としての保育体制が定着しました。

巡回相談は自ら保育者と協働しながら、障害をもつ子どもにかかわる人と人をつなく橋渡しだと思えます。(淑徳短期大学兼任講師)

教育学者のあたふた子育て・親育ち(1)

母として保育者の専門性を考える(1)

佐久間亜紀

はじめに

昨年出産し、母になりました。

早速、編集部から「教育学者として、母として、い
ま思うことを書いてみませんか」という依頼を何度も
いただきましたが、そのたびにお断りしていました。

私のパソコンは「キョーイクガクシャ」と入力すると
「驚異苦学者」と変換してくれますが、本当に私はた
だ驚異的に苦学してきたような者で、「学者」なんてい
われると赤面してしまいます。しかも、私の専門は学

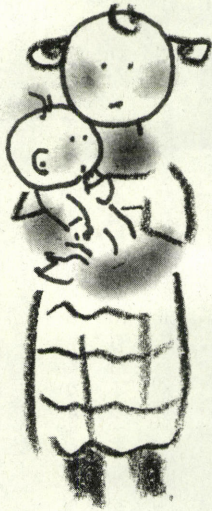
校教育学で、赤ちゃんも幼児も全くの初心者。毎日毎
日、どたばた、あたふた、おろおろの生活を必死で送っ
ているだけで、ほかのお母さん方と全く一緒です。

ただ、よく考えてみると、いまままで教職の専門性を
研究し、子どもや教師を支援する仕事をしてきた私が、
支援する側から支援される側になって初めて感じたこ
とはたくさんありました。支援される当事者として、
助産師や医師、保育者や行政スタッフなど、「子育て支
援」の専門家の皆さんと出会うと、「専門性っていった
い何?」と考えさせられることばかりです。そして、

一人の「専門家」としての私自身のありさまについても、きびしく振り返ることを余儀なくされています。

ていねいなご依頼を何度もいただくうちに、「あれこれと揺れ動く気持ちや、さまざまに思いあぐねた事柄を、文章としてとどめてみてよいかもしれない」と思うようになりました。

私は幼児教育や保育については全くの門外漢ですが、私の個人的経験をご紹介することで何かのお役に立つのならと、初めての子育てに向き合いながら考えたことを、つづつてみようと思います。



嵐は突然に

その日は突然にやってきました。ある日曜日の夕方、それまで何の病気もせず元気に育っていた娘が、急にひどい勢いで吐き始めました。娘が七か月になったばかりの晩秋のことでした。

何度も何度も吐き続け、顔も真っ青、とても苦しうで、ただごとではない様子です。そのうち熱が上がり、たどたどと音をとって水様便がとびだし、衣服やシートにあふれてしまいます。やっとのことで汚れたシートやおむつを替えると、次のプリプリッ！がやってきます。うんちの色もどんどん変化して、なんと、真っ白になってしまいました。これこそが噂に聞く「お腹の風邪の王様」、ロタウイルスとやらのしわざか。生まれて初めての病気だし、娘はかわいそうなくらいに苦しんでいましたが、不思議と私の腹は据わっていました。

というのも、思い当たる節があったのです。二日前に地域の子どもたちが集まる広場に参加していました。

「きつとその時、ウイルスをもらって来たんだ!」。新米ママであっても、何が起こっているかが理解できれば、それなりに落ち着いて事態に対処することができません。娘と夫と一緒にひと晩頑張り、翌朝、小児科にかけこんで、事なきを得ました。

追いつめられた母の気持ち

しかし、それはその後何か月も続く長い苦闘の、ほんの始まりにすぎませんでした。それからというもの、やっと回復してきたかなと思うころにまた嘔吐し、ひどい下痢になることを繰り返すようになったのです。そのたびにひどい脱水症状になり、入退院を繰り返しました。

私が冷静でいられたのは二回目まででした。原因のウイルス名が特定できたのは最初だけで、なぜ娘が短期間に何回も嘔吐下痢症を繰り返すのか、理解できま

せんでした。いったいわが子の身体に何が起こっているのだろうか? この先いつたいつたどうなってしまうのだろうか? 親戚や友人の「きつともう吐かないよ」「心配しすぎだよ」といったアドバイスは、もはや私の耳には届きませんでした。吐瀉物中のウイルスは数m飛び散って壁にも付着すると聞き、床ならず壁まで磨いて、狂ったように家中を掃除し続けました。ウイルスによる嘔吐で汚れた衣服やシーツは捨てさせる病院がある。と聞いては、すべてを処分し、洗濯機も除菌しました。家の空気の乾燥がよくないと聞いては、湿度計と加湿器も購入しました。もう必死です。娘がもう二度と吐きませんようにと、毎日毎日、祈るような気持ちで過ごしました。

一番つらかったのは、感染症をほかの赤ちゃんにうつしては悪いので、近所のママ友とも会えなくなり、スーパリーなど人混みにも出られず、いわば自宅軟禁状態になったことです。疲労と孤独が、私の不安をますます増大させていきました。長年自宅軟禁されている

ミャンマーのアウン・サン・スー・チーさんの過酷を、何度想起したことでしょう。

育児の難敵は「不安」

初めての病気でも原因がわかっていたら落ち着いて対処できたのに、何がどうなっているのか理解できず先が見えなくなった時、私は心の底から不安になりました。そして不安のさなかでは、あらゆる理性が吹き飛ばされ、いつもの私でなくなってしまうのです。

いままで私は「苦学」し、対象を冷静に観察したり、データに基づいて多角的に分析したりする訓練を、いやというほど受けてきました。その私ですらこうなのです。学校で教師に理不尽な要求をつきつけて「モンスター・ペアレンツ」などと呼ばれる親たちも、きっと私のように、かかえきれない不安に押しつぶされそうになっているのではないかと思うようになりました。そもそも親は、専門家のようにさまざま子どもを見てきた経験をもちませんから、見通しがもてない

時には不安を抱くほうがむしろ自然です。「モンスター」なのは親自身ではなく、制御できないほどふくれあがってしまう「不安」のほうなのです。

専門家の追い打ち

ところが、学校の教師だけでなく、育児支援を掲げているはずの専門家たちですら、親を批判することが多くなっているのではないかと、感じる事が度々ありました。

娘が四度目に吐き始めた時のことです。それまでは三回とも急性胃腸炎という診断でしたが、「もう一度吐くことがあったら、ただの不運ではすまされませんね」と担当医に告げられていたので、私は文字通り真っ青になりました。ところがその悪夢の日、なんと総合病院が休診で、ほかの小児科を受診しなければならなくなりました。

私は、娘の発症から今までの経緯や病状を一覧表にして紙にまとめ、緊張して診察を待ちました。とても

混んでいたので、短時間できちんと説明しなければ、と思つたのです。待ち時間は永遠に感じられました。

やっと診察に呼ばれ、「昨晚から嘔吐と下痢がひどいのです。昨晚からおしっこが出ていません。二か月前から嘔吐と下痢を繰り返しています」と言い、すぐる思いで経緯を書いた紙を差し出しました。ところが、医師は「嘔吐下痢症ね。はい、点滴しますから」のひと言だけというと、病名と解説が書かれた小さな用紙を私に手渡し「次！」と別の患者を呼ぶではありませんか。

「ちょ、ちょっと待ってください、先生」あまりの対応に当惑した私は、そんなひと言すらも言えず、口をついて出たのは「あの、嘔吐と下痢を繰り返しているのですが」という言葉だけでした。するとどうでしょう。医師は、「だから嘔吐下痢症なんですよ!? 点滴するって言ってるでしょう!? 何を心配しているかわからない! 次!」と言い、私の書いた紙を突き返してきたのです。呆然としている間に、看護師に背中を押

されて、気づいたら診察室の外にいました。苦しむ娘に笑顔を向ける余裕どころか、これからどうすればよいのだろうかと思然と立ちつくしたのを覚えています。

対人専門職の専門性とは

半年を経たいまの私なら、あの日のあの場面を少し冷静に振り返ることが出来ます。医師の態度は、なぜあのようになってしまったのでしょうか。

おそらく、この医師は自分は医師としての責任をしっかりと果たしていると言うに違いありません。彼は、短い時間できちんと診断し、検査や投薬や点滴の指示を出し、この日の娘の症状には的確に対処しているのだらうと思います。病気の説明さえ、あらかじめパンフレットを準備して患者に手渡すシステムにし、時間を節約していました。この医師は、患者を効率的に診断して待ち時間を短くし、一人でも多くの患者を診療することが、医師としての責任のとり方だととらえているのです。そんな彼にとっては、母親の要領を

得ない話にいちいちつき合うことは、ほかの患者を診る時間を犠牲することに等しかったでしょう。

しかし私にとってみれば、この医師は娘の「症状」には対処してくれても、娘という「存在」には向き合ってくれなかったと感じたのです。この医師には、私の訴えに応答しようとする態度が感じられませんでした。実は、その後娘の胃に異常があることが判明するのですが、もしもこの時、この医師が母親である私の訴えに耳を傾けてくれていれば、娘はその後も苦しまなくてすんだかもしれません。

英語で「責任をもつ」「信頼できる」という意味をもつ「レスポンスイブル (responsible)」という単語は、同時に「返事をする」「応答する」という意味も含んでいます。つまり、クライアントの話にしっかりと耳を傾け、きちんと応答することが「責任をとる」ということの中に含まれているのです。この医師は、この日の娘の症状に医学的に的確に対処したという点では、「結果責任」を果たしていましたし、症状と治療の説

明が書かれたパンフレットを私に手渡したという点では「説明責任」も果たしていました。しかし、娘はなぜ長期間にわたって嘔吐下痢を繰り返しているのか、という私からの「問いかけ」に、専門家としてしっかりと向き合おうとする「応答責任」を果たしていたかについては、少々疑問の余地が残ります。

いまだきの学校でも、多くの教師たちが「子どもの学力向上」に対処せよと求められ、皮肉にも一人ひとりの「子ども」に向き合うことが難しくなっていることが想起されます。

さて、私はその後、あの日の医師の態度に深く傷つきつつ、四月の保育園入園を心待ちにしていました。たくさん赤ちゃんを見てきた保育士の方が、毎日娘の状況を一緒に見てくださるなら百人力、きつと未来がひらけるに違いないと希望をもったからです。しかし、その期待は残念ながら裏切られることになりました。(次号につづく)

(上越教育大学准教授)

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (14)

「日記」をキーワードとして

藤枝充子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション (略称 TeaPot)」にてバックナンバーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼はじめに―「日記」を選んだ理由

『幼児の教育』のネット公開と検索機能について知り、さらにこのようなネット公開に寄せた意見を述べる機会をいただいた時、初めに検索キーワードとして思いついた語は「日記」でした。

私は、家族や家庭の中で子どもに対して行われる教育的営みと、その中で子どもが育っていく姿を、歴史的に明らかにしたいと考え、日々研究している者です。これまでは、教育的営みの一つであり、教育力が低下したと指摘される「家庭教育」の成立期に着目し、一八九〇年前後から「家庭教育」のあり方を示すため徐々に出版されるようになった啓蒙的著作物である家庭教育書を分析対象として、当時の人々がどのような「家庭教育」をつくりあげようとしていたのかの解明に取り組んできました。家庭教育書としては、これまで、明治・大正期に書かれた久津見蔵村の『家庭教育子

供の志つけ』〔前川文栄閣、一九〇二(明治35)年〕、麻生正藏の『家庭教育の原理と実際』〔北文館、一九一五(大正4)年〕などを読んできました。

しかし、家庭教育書の分析からだけでは、子どもの日常生活や、その中で子どもが育っていく姿を明らかにすることはできませんでした。今後、さらに研究上の興味を深めていくためには、子どもの日常生活と子どもが育っていく姿を知るための史料を対象とすることが必要となります。そして、そのための史料の一つが育児日記だと考えています。

こうした研究上の興味やいきさつの中で、『幼児の教育』誌上には、いったいどのような日記が掲載されたのか、今回、ぜひ知りたいと思ひ、「日記」を検索キーワードに選びました。

▼検出された「日記」

「日記」で検出された記事は六十二件、その内、保護

者が書いた育児日記は三十七件でした。そのほかには保育者による保育記録、保育者の保育記録とそれに対する保護者の感想、育児日記を奨励する記事などが検出されました。先の三十七件は、五名の保護者により書かれており、その中の四名は複数回に分けて育児日記を掲載しています。

五名の保護者によって書かれた日記(①～⑤はそれぞれ、①著者、②掲載時期と回数、③子どもの生年月日と性別、④父母・きょうだいと子どもを取り巻く主な人々、⑤掲載されている育児日記の期間を表す)は、次の通りでした。

「或母の日記」

①無名氏

②一九〇一(明治34)年五月から一九〇二年四月までの間に計六回掲載。

③一九〇〇(明治33)年九月三〇日生まれの女兒。一

子のみ。

④父(小学校教員)、母(専業主婦)、祖父母、借宅の老婆一人、近所の家族、掛かりつけ医師など。

⑤誕生ころから一九〇二(明治35)年一月まで(誕生時から一歳三か月過ぎまで)。

「小さき日記」

①印東音鳴

②一九〇一年九月から一九〇二年六月までの間に計五回掲載。

③一九〇〇年七月生まれの男児と一八九八(明治31)年三月生まれの女児。弟と姉。

④父母、親戚(叔父叔母など)、爺やと婆や、下婢二名、守、掛かりつけ医師など。

⑤一九〇一年八月から一九〇二年二月まで(弟・一歳から一歳六か月まで、姉・三歳五か月から三歳十一か月まで)。

「富士ちゃんの日記」

①会員某女

②一九〇三(明治36)年二月から四月の計三回掲載。

③一九〇一年十一月生まれ。性別不明。一子のみ。

④父母、祖母、叔父、親戚など。

⑤一九〇二年七月から九月まで(九か月から十一月まで)。

「貞一の日記」

①その母

②一九〇四(明治37)年七月から一九〇六(明治39)年七月までの間に計二十二回掲載。

③一九〇三年五月三十一日生まれの男児。長男。一子のみ。

④父母(共に教員)、祖母、親戚(曾祖母、伯父、おば、いとこなど)、家庭教師(幼稚園教諭経験者)、婆や、複数の女中、掛かりつけの医師、父母の知人

たちなど。

- ⑤ 一九〇三年六月から一九〇六年五月まで(生後四六日目から満三歳まで)。

「養育日記の中より」

- ① 速水信
② 一九一一(明治44)年十二月の一回掲載。
③ 生年月日不明の男児。但し、一九〇八(明治41)年正月で四歳。妹あり。
④ 父母、祖父母など。
⑤ 一九〇八年一月から同年十一月まで(四歳)。

▼育兒日記の内容の紹介

育兒日記の掲載が一九〇〇年代(あるいは明治三十年代)に多いのは、当時盛んであった児童研究のためと考えられます。

ご存じのように、その時期の児童研究の目的は、欧

米から取り入れられた教育内容や方法を日本の子どもに適するものにするため、日本の子どもの心身の発達について明らかにすることでした。たとえば、高島平三郎は、「小兒研究(二)」(『教育壇』第五号 一八九七(明治30)年六月)で、子どもの心身の発達を知るための一つの方法である「特殊觀察^{註1}」の項目として、「身体の健否」、「身長、体重、胸囲、頭囲」、「声音及言語」、「各覚官作用の發育状態」、「記憶及觀念連合の状態、推理作用」、「情(好悪)及發表」などを挙げています。育兒日記では、これらの項目について、子どもの日常生活を描く中で触られています。

三十七件の育兒日記の記述の中で、筆者にとって印象的なのが、子どもと子どもを取り巻く人々との交流を記録した部分ですが、ここでは「婦人と子ども」(『幼児の教育』の前身誌上計二十二回連載された「貞一の日記」(貞一の母による日記)から幾つか紹介したいと思います。

父の膝に乗り、押して頂戴といえは両手にて、父の胸を押し、父仰向に、転げて起して頂戴といえは、指をつかみて引張る。頭にて押し合いといつて父頭を出せば、自分も頭をつき出し左右に動かしながら押す。第五卷第一号（一九〇四年十一月二十一日）

この引用部分は、子どもと父親が遊んでいる様子です。このほかにも、父親が、離乳時期の子どもを寝かしつけたり、子どもを連れて遊びに行くなど、子どもと積極的にかわる場面がたびたび描かれています。

正月休み中、家に帰り居りし春さん今日来る。余程嬉しき者と見え、傍へよりては抱けとせがみ、又自分の持てる蜜柑の皮を、春さんに渡して、ご機嫌とり、ア、イ、ブなどいう。

第五卷第二号（一九〇五年一月八日）

これは、女中の春さんが、正月休み明けに帰ってきた時の様子です。家庭教師とは異なり、子どものしつけや教育に携わることのない春さんですが、子どもとの間に情緒的な関係が築かれていることがわかります。

名八さんと、外にて遊び、近所の子供の全し位のと、喧嘩して、取っ組み合いを始む。名八さんが、引き分けると、真赤な顔して自分の持ち居りし山吹の枝にて、相手の顔を打つ。

第六卷第六号（一九〇六年五月五日）

最後に紹介したこの日記は、近所の同年齢の子どもたちとのけんかについてです。名八さんは従兄で、日記には数回登場します。彼が、独りでは遊びに行けない貞一を外遊びに連れ出した時のことが書かれています。

ここでは、一つの育児日記からのみ引用しています

が、五つの育児日記には、子どもの成長を愛情深く見守る人々、家庭教師、複数の使用人などが登場し、またピアノという贅沢な楽器が出てくるなど、恵まれた家庭生活が描かれています。

▼おわりに

「日記」を検索キーワードとして検出された育児日記の記述から、子どもを取り巻く人々が子どもへ与えた影響や子どもが育つていく姿、さらに家庭の教育力として何を読み取るかは今後の課題です。その際には、検索によって取りこぼす育児日記があるかもしれないこと、また、本誌に掲載された育児日記から見えないこと、見えないことを常に意識する必要があると感じました。

最後になりましたが、膨大な作業を積み上げ、貴重な史料の閲覧を容易にしてくださったこと、さらに利

用者の要望に迅速に対応してくださっていることに感謝申し上げます。今後は、検索語の工夫をしながら、ネット公開されている「幼児の教育」をさらに活用させていただきますと思います。

(東京純心女子大学准教授)

注

・「特殊観察」とは、一定の子どもの発育日記であり、その子どもと生活を共にしている者が記述することが求められる記録であった。

参考文献

- ・高島平三郎「小児研究」「教育壇」第四号 一八九七(明治30)年五月 1～25頁
- ・高島平三郎「小児研究(二)」「教育壇」第五号、一八九七年六月、31～59頁
- ・高島平三郎「我國に於ける兒童研究の發達」「兒童研究」第一卷第二号、一八九八(明治31)年十二月、5～15頁
- ・青木一他編集代表「保育幼児教育体系 第五卷 10 保育の思想 日本」労働旬報社、一九八七年

保育の現場から

小さな園の歩みから

飯利美知子



私の保育の現場は、茨城県にある本年度の園児数四十二名の小さな私立幼稚園です。五年前、園児が三十四名に激減した状況を保育者として引き継ぎ、「遊びを大切にする保育」を方針として打ち出して子どもたちと過ごしています。地域の幼稚園事情は、体操・英語・絵画・習字教室などを保育に導入する園や、園児獲得のため保育日数を保育園並みに増やす園が多く、私が引き継いだ時に「その流れに追随

したほうが……」との声もありました。でも、何よりも「子どもたちが元気に・楽しくすごす幼稚園」でありたいと思いましたし、その様子が外に伝われば、きっと園児も増えるはず！ と考えたのです。一年目・二年目は、「遊びを大切にする保育」の基礎作りと遊びの中での子どもの育ちをどのように発信するか、試行錯誤の日々でした。

園長・保育者二名・事務一名というギリギリの体

制の中、園バスの運転手にも手伝ってもらい、月二回の見学日を始めたり、「お友達と思いつき遊びます！遊びを通して豊かに成長します！」のキャッチコピーをポスターにして、お母さんたちが地域のあちらこちらに貼ったりしました。また、園児が二十四名になってしまった二年目の運動会やおゆうぎ会は、卒園生の応援参加で盛り上げたりとみんなで知恵を出し合って園の急場をしのいだのでした。

そのような状況での三年目に、十一名の三歳児と三名の四歳児が入園しました。それは、見学日を通して「遊びを大切にする保育」の楽しさが伝わり始めたとの手応えを感じたことでしたし、園の存続が守られたことでもあり、十四名の子どもたちが「希望の光」のようで大きな喜びとなったのです（それでも、三年目の全園児数は二十六名でしたが……）。そして、入園した一人ひとり、自分らしさを発揮

して園生活を送れるようになるまでの日々を刻みながら、この三年間を歩んできました。中でもR（男児・一人っ子）の歩みは、平坦な道のりではありませんでした。

Rは、入園前の一年近くの間、月二回の見学日にほとんど休まず来ていて、お母さんと一緒に工作コーナーで遊ぶ姿がよく見られました。自分のイメージをもち、お母さんに手伝ってもらいながら一所懸命作り上げようとしていて、お母さんもRが作品を完成させるうれしさを体験するようにといいねにかかわっていて、「作る遊びが好き」との印象がありました。そしてその様子に、「見学を通してなじみのある幼稚園で、好きな遊びを楽しみながら園生活を送ってくれるだろう」と思われたのですが、Rが自分らしさを発揮するまでには、かなりの時間を要することになったのです。

入園当初の激しい泣きに、お母さんはRが泣きながらでもバイバイをするまで寄り添い、私も「安心して過ごせるように・好きな遊びを楽しめるように」と、心を寄せてかかわったつもりでした。でも、登園時の泣きがなくなつて友達と遊ぶようになっても、どこか心から楽しんでいないことが伝わってくるR……。そのくすぶりは、時に頻尿になつたり、「給食のキャベツがイヤー」に凝縮されて登園しづりになつたりして、年中組の秋ごろまで続きました。Rの抱えたくすぶる思いは感じるのだけれど、それを晴らしてあげることがなかなかできずに時間が流れていく……。保育者としての閉塞感をかみしめる日々でもありました。

そんなRが、スルスルツとくすぶりから抜け出したのは年中組の冬ごろで、同じく三年保育で入園したH（男児）とのかかわりからだつたと思います。

Hは二歳違いの弟がいて、お母さんの実家の田ん

ぼや畑で遊ぶ体験が多く、活発でいつも動き回っている印象で、それまではRとの接点は少ないほうでした。そのHは、年中組の秋ごろに突然ジャズに興味をもち始め、「せんせー、ソニー・ロリンズしてる？ スタン・ゲッツは？」とか、「オルター・デイビス・ジュニアはピアノ、リー・モーガンはトランペットなんだよ！」と、ミュージシャンのアレコレを教えてくれるのでした。ジャズには全く関心のない私には「知らない」ことばかりで、Hの話の一つひとつに感心するばかりでした（お父さんがジャズが好きで、CDを聴いたり、コピー版に書き込んで楽しむ様子に興味をもったのが始まりだったようです）。

そしてジャズへの興味は工作へとつながり、丸く切ったダンボールに「ぶるう・のーと 100」などとタイトルを書き、袋を作つてジャケット風にするというCD作りに熱中するのです。また、クリス

マスには「ルー・ローズのDVD」をサンタさんにお願ひし、「これ、とどいたんだ！」と満面の笑みで見せてくれました。その喜びは三学期に続き、ルー・ローズのDVDやお気に入りのブルー・ノート100をはじめ、ジャズのCD複写版作りを毎日楽しそうに繰り返すHなのでした（そんな中で、初めころは「ぶるう・のーと」だったのが、その後「ブルー・ノート」になり、年長組になると「JAZZ・BLUE NOTE」となったのは、Hのジャズへののめり込み度と遊びの真剣さの表れといえるのではないでしょうか）。

そんなHのそばに、いつの間にかRがいるようになり、同じテーブルでそれぞれの工作をしたり、一緒にCD作りをしたりする姿が見られるようになりました。その光景は、Hのジャズへのウキウキした気分にも自然に気持ち弾ませていくような、二人の響き合いともいえる雰囲気を感じられ、「あつ、

Rは一步踏み出すかも？」と静かにワクワクした私でした。

そして予感通り、二人は一緒に遊ぶ時間が長くなり、年長組になってからは、登園後どちらからともなく紙やペン・セロハンテープを用意して工作に熱中したり、二人でストーリーを展開させながら絵を描いて笑い合ったりとかかわりを深めていき、そんなRに「ああ、やっ」とくすぶりが晴れた！」とホッとしたのでした。

（Hのジャズへの熱中ぶりはずっと続き、紙やペットボトルのふたでトランプット・サク・トロンボー



ンを作って演奏会ごっこをしたりして、とても楽しく広がっていきました。

Rは、Hに何を感じてそばに行ったのか？ Hの何がRのくすぶりを晴らすキッカケになったのか？ それを改めて考える中で、私はやっと気づいたことがあります。それは、「Rにとってお母さんの存在は、いつも遊びを支えてくれる大きな力であり、遊びを楽しく広げるための大切なパートナーであった」こと、そのお母さんがいない幼稚園での不安・戸惑いは、私の想像をはるかに超えた深いものだったのだろうということ。保育者である私がお母さんに代わる存在になり得なかったのは事実ですが、それほどにRとお母さんの遊びを土台としたかかわりが強かったのだと思われました。

Rは年少組の時から、降園後の園庭で、お迎えのお母さんに押してもらってブランコを高く・高くこ

ぐ姿が、毎日のように見られました。その勢いと園でのくすぶりのギャップがずっと心に引つかかっていたのですが、「もっと！」とせがんで、見ていてハラハラするほどこいでいたのは、お母さんから離れて園ですごすRの「とびたい！」「くすぶりを晴らしたい！」思いであったのかもしれない。

その思いの高まった「時」が、Hがジャズで遊びを始めた時に重なったのか……。また、年少組の時のイメージとは違った「らしさ」を表し、一人で遊びを広げるHに何かを感じたのか……。いずれにしても、RとHの「らしさ」がふれ合う瞬間があつて、園生活が一年以上も過ぎたところで二人は「新しく出会い」、遊びを通して響き合い・楽しさを共有してかわりを深めていった歩みが残されました。そして、それは、「Rは、お母さんに代わる新しいパートナーを見つけた」と言えることだったのだと思えました。

園児一人ひとりの「らしさ」が花開くまでに、保育者としてどんな支え方・援助をしたらいいのかは、いつも手探りです。そして、「らしさ」がどんな花となるのかも予想通りではありません。でも、「あつ、この子の花が開いてきたー」と感じる瞬間の喜びが、保育の大きな励み・支えになって私の背中を押してくれるように思います。

幼稚園存続の危機ともいえる三年間をどうにか乗り越え、四年目は三十八名・五年目の今は四十二名と、少しずつ園児が増えてきましたが、一名の増減に一喜一憂の状況はまだ続きそうです。また、若い保育者と共に「遊びを大切にする保育」の充実のために日々の保育を積み重ねていかなければなりませんし、この保育の中での子どもたちの育ちを地域に発信し伝えることの難しさを、強く感じるこのごろです。

でも、こんな厳しい現実ではありますが、子どもたちの「笑顔いっぱい！ 夢いっぱい！」を詞にして、幼稚園の歌もできました。先は見えないけれど、みんなが楽しく思いっきり遊び、育ち合う場でありますようにと願っています。

「希望の光」となった子どもたちも、もうすぐ、卒園・入学の準備をする時となりました。入園当初の幼さが懐かしくなるほど、幼稚園の一番上のお兄さん・お姉さんとしてたくましい存在です。Rだけでなく、はじけた笑顔で遊びを広げていく子どもたち一人ひとりの歩みを思い返す時、子どもの成長の尊さと、それにかかわる保育の仕事を改めて感じさせられます。

少人数ではあっても、そんな子どもたちとの響き合いが、小さな園の歩みを進める力となって、保育の現場に立つ私たちを支えてくれて、元気を与えてくれるでしょう。

(公認・こもりや幼稚園)

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(38)〉

保育学会自主シンポジウム

「女子大における総合的保育者養成の試み」を振り返って(1)

菊地知子

シンポジウムの概要

二〇〇八年五月に千葉大学を会場に開催された「第六十二回日本保育学会」において、お茶の水女子大学幼保の発達を見通したカリキュラム開発（以下、幼保プロジェクト）では、プロジェクトリーダー浜口順子の司会のもと、表題の自主シンポジウムを行いました。テーマ設定の趣旨を浜口は以下のように示しました。

「育児力やコミュニケーション能力の低下が叫ばれ、

子育て支援の在り方が問題化している現在、職業的保育者養成に特化しない（総合的保育者）養成が女子大

学の学びに必要ではないかという課題意識を背景に、お茶大では、社会の各方面で活躍する女性に求められる子ども・保育理解の経験を育てるカリキュラムを模索している。そのために教職科目と専門科目の担当者の交流を行ったり、多様な実践現場と協力して複眼的に学生の実習を指導したりしてきた。^{註1}今回は、その現場の先生たちと共に、免許・資格と関係ない実習の受け入れが、学生にとって、また現場にとってどのような意義と困難さがあるのかを考えていきたい」。

話題提供者は、お茶大生活科学部発達臨床心理学講座（以下、発臨）をメインとする学部四年間の課程に

において、観察や実習などで学生を受け入れてくれる各保育現場から一人ずつお願いしました。具体的には、愛育養護学校から校長の板野正儀さん、「障がい児放課後クラブはすねっこ」から代表の佐藤キミオさん、お茶大附属幼稚園から教諭の高橋陽子さん、そしてお茶大附属いずみナーサリーから主任の私市和子さんの四名です。

また指定討論者として、保育研究者の津守房江氏と、幼保プロジェクトメンバーでもある、お茶大名譽教授の牧野カツ子氏にご登壇いただきました。

当日は、司会の浜口からシンポジウムの企画意図の説明や、話題提供者の紹介があり、続いて現在お茶大でどのように授業が展開されているかの紹介がされました。それに続き、各保育現場のスタッフから、それぞれの現場の概要や保育の様子、学生の受け入れのスタイルなどについて話題提供があり、質疑応答を挟んで指定討論者からお話をいただき、再び質疑応答に入りました。

以下、実際のシンポジウムの様子の前半を、当日の流れに沿ってかいつまんで見ていきたいと思います。

シンポジウムの実際(前半)

浜口 お茶大では、附属幼稚園と附属の保育所であるいずみナーサリーと大学が一緒になって学生を育てていこうという幼保プロジェクトというものがあり、このシンポジウムは幼保プロジェクトの企画で開くことになりました。女子大学における、ということは具体的には私たちの実践です。お茶大における、ということになります。私たちのやっていることが少しでも社会にとって意味のあることにつながるといいなということを期待して、皆さんのご意見をお聞きしながら、私たちの今後につなげていきたいと思います。

板野 愛育養護学校は、現在は学校法人愛育学園が運営する養護学校ということになっています。幼稚部と小学部だけの学校で、現在二十三名の子どもたちが通ってきています。^{注2}

現在、インターシップなどでお茶大に限らずいろいろな学校から学生さんに来ていただいています。が、教職の教育実習だけという形ではお受けしていないところが、このシンポジウムの趣旨に沿っているかなと思います。愛育に出来る動機もさまざまです。親戚に障りのある子どもが生まれて障りについて学びたいとか、本では読んだけれども実際に子どもに接したことがないとか、将来教師になりたいという方もお見えになります。近ごろは愛育養護学校だから来てみたいと思つて来てくださる学生さんもおられますけれども、連れて来られたのがたまたま愛育で、実習でお世話になつてそのまま愛育にいまだにいる、という、私のようなケースもあります。

子どもが主体ですので、あまりカリキュラムをかちつと決めないで、子どもたちが日々始めたことから一日を過ごすということを毎日やっています。学生さんが来るということも、その日の一つの出来事になるわけで、学生さんと子どもたちが出会ってどんなふう

に過ごすか、それにより昨日とまた違うことが今日始まるということになります。だから学生さんにとつても出会いだし、子どもたちにとつても出会いになるようにやつていきたいと考えています。

実習生もこうして、お客さんではなくその日のメンバーとして、ほかの保育者と交じつて、子どもたちと過ごせるように考えています。子どもが外に出て行くような場面にも一緒に参加していただいて子どもたちと一緒に一日を過ごす。そしてその中で子どもたちについての感触を得る。子どもたちと出会った時に自分はどうとらえるか、自分をどうとらえるかということが焦点化されるのかなと思つています。そして保育の後にそういう感触を、疑問や質問として投げかけてもらい、お互いが子どもたちの一日を振り返るミーティングをするようにしています。そこまでを含めて一日の学生さんたちとのかかわりと考えています。実習に参加した学生さんたちがその日の感触、どんな疑問や問いをもたれたかをお聞きすることが非常に楽しみで

す。そんなふうを受け入れながらやっています。

佐藤 「はすねっこ」は東京都板橋区の都営団地の一角にある小さな施設で、いま四年目のまだまだ未熟な場所です。小学生から高校生までの子どもたちが通ってきて注³てくれています。外にも行きますが、なかなか出られず大人と子どもで密な空間で関係をつくりながら一日を過ごすということが日常的で、二〇〇八年度から、夏休みをメインにお茶大の、主に一年生の学生さんたちが来てくれることになりました。「はすねっこ」の場合はカリキュラムとこのを特に決めていません。それはやっぱり子どもたちが始めたこと、自分の思いから始めたことに一番近いところで環境をつくりたいということがあり、それを学生さんたちもすごく理解してくれて、一日を子どもたちと過ごしてくれていたと思います。子どもたちにとっても、一日限りの一回の出会いではあるけれども、その学生さんたちを信頼して一緒に時間を過ごす、共に過ごすという^注ことを、そこにいる人間が皆、お互いにやっていた

ような気がしています。子どもはその中で生活をしてるので、いろいろな形で揺れている、揺れている思いが場を揺らしている、ということもあります。子どもがいろいろな思いを出して、子どもの思いを受けながら、子どもたちの思いに揺れながら、一緒になってその生活をつくっていくという、そこを体を通して一緒にやっていってほしい、というふうに思います。

また、特にプログラムを立てているわけでもカリキュラムを立てているわけでもない中で、学生さんたちが実際に、どういうふうに体験されたのか、子どもたちがどういうふうに感じながら生活したのかということ、どこかで振り返る必要があると思います。そういう意味で保育後のミーティングは大切にしたと思っています、そこはかなり意識的に場をつくっています。高橋 附属幼稚園では、教育実習として最大十二人、それ以外に観察の授業やインターンシップなど、いろいろな形で学生さんをお受けしています。

子どもの様子を見る時、何を見るかはとても難しい

ことだと思ふけれど、おもしろそうだから今日はこの子を見ようとか、ああこんな遊びが幼稚園であるんだってということに驚いてちよつとそこに居続けるとか、それは本当に学生さんの、その時にふつと思つたこと、その時、心を動かしたことで見ていてくれるみたいで、それはもう全然こちらとも思わず、どうぞいろいろ見ていってねって思つているところなんです。

学生さんたちの多くは十九歳とか二十歳とかですから、もしかしたら私たちのような保育者よりも子どもに近い所にいるかもしれません。でも一方では、子どもが好きとか子どもにかかわる仕事をする、ということのために知識や技術として、頭の中の考えとして、自分に鑑よろいのようにくつつけてきた体で子どもを見てしまふ、子どもと過よろいごしてしまふ、ということもありがちなように思います。実習やインターンシップであれば大人として、社会人として振る舞つてほしい、という期待も一方ではありながら、くつつけてきた知識や

先人観をはがしながら子どもとありのままに、自分もありのままの姿を出しながらかわつてほしいということもあり、その両方を学生さんには期待しているところ です。

私市 いずみナーサリー（以下、ナーサリー）は、女性研究者支援、職員の福利厚生が目的のお茶大の中にある保育施設です。六か月から三歳未満児が、その日によつて人数は違いますが今は十七名前後、四・五月は少なめで、十名程度で過よろいごしています。保護者の七割が学部生や院生です。観察実習、インターンシップ、ボランティアの三つの形態で学生を受け入れています。ボランティアについては、発臨の方だけじゃなく生活科の方や、食物科の学生さんも入っています。食物科の学生グループがおやつの献立を作り、週一回手作りおやつを作ってくれます。おやつ作りの後に保育にも入よろいつてくれます。

保育所は小さな子どもたちの生活の場なので、学生さんが入るといふことで子どもたちが不安にならない

ように私たちは配慮します。子どもには人見知りの時期もあるので、そういう時には同じ空間でもちよつと離れたところに居て、徐々に徐々に慣れてきて近づいて、ということをしてもらつたりします。同じ空間で共に生活する人になり、どちら心地よく過ごせるようになると、気持ちが変わり合える関係になつていくのではないかと思つています。そして学生さんは育児行為にとても自信をもち始めます。たとえば、一、二年時ボランティアで半日だけ入つていたある学生さんが、三年生でインターンシップとして週一回入るようになり、一人ひとりに生活リズムがあるということ、家庭を含む一日の流れの中に保育所の生活があるということに気づいた、と言いました。また、コミュニケーションの難しいとされる〇〜二歳児の、泣くことや拒否することの意味を悩みながら考え追求し、寄り添いその子の心を読むことで、子どもへの理解ができるのではないだろうかと思つてくれた人もいます。ナーサリーは五時半までやっているの、なかなか話

し合いの時間がとれませんが、保育士も一緒にお昼を食べながら話す時間を確保しようとしています。

また、大学での振り返りが、学生の学びになつて、大学と現場と両方が振り返ること、理論と実践が融合していけるのではないだろうかと思つています。私たち現場の保育士も、大学と記録を共有して学生の疑問に真摯に向き合い応えることで、まだまだ日の浅いナーサリーでの自分たちの保育を振り返ることが、今できているのではないかと思つています。

(次号では、シンポジウム後半の、指定討論者による問題提起と討議の様子をお伝えしようと思つています。)

(お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師)

注

1 大学の授業としての総合的保育者養成への取り組みについては、『幼児の教育』第二〇七巻第十号、第二〇八巻第六号等を参照されたい。

2 愛育養護学校の成り立ちや保育については、愛育養護学校五十年史「あゆみ」などに詳しい。

3 はすねっこについては、『幼児の教育』第二〇六巻第十号を、またはすねっこでの実習については第二〇八巻第八号を参照されたい。

編集後記

先月号からの前原寛先生による連載「保育の創意工夫」を読むと、子どもの生活が保育者のひとひねりの工夫によって守りはぐくまれていることに気づく。今月は、昼寝をする時間を午前に移した工夫について書かれている。昼寝を昼に、という常識が、現代の子どもの生活に必ずしも合わないという変化に言い知れぬ不安も感じる。

夜型の保護者には早寝早起きの必要性は説きつつも、子どもの園生活をできるところから具体的に組み直し、「元気な姿」を保護者の前に示しうる実践力。佐久間先生の言われる応答する力という専門性にもつながるだろう。子どもにも保護者にも応答するのが保育者の責任である。矛盾があって当然であり、矛盾を矛盾として引き受ける柔軟性も専門的力量的の内なのか。(H)

幼児の教育 第109巻 第2号

平成22年 2月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集担当 金子めぐみ
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円(本体524円)
©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館
表紙絵 後宮ひろみ
扉題字 津守 眞
本文カット 田崎トシ子
編集スタッフ 高橋陽子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

〈特集〉いま、倉橋と出会う(3)

「子どもたちを送る日」

松井とし・河邊貴子

●インタビュー3 ● 鈴木とく(聞き手・塩崎美穂)

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開が始まりました!
お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション”TeaPot”
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。
明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定です。
ご意見ご感想などは、yujimail@yahoo.co.jpまでお寄せ下さい。

“自然の中での子どもの育ち”について考えてみませんか？

園をみどりのオアシスへ

幼児保育における放牧の思想

荒井 洌／著

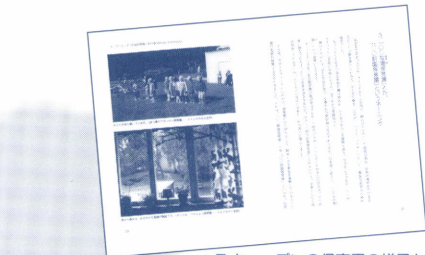


10743

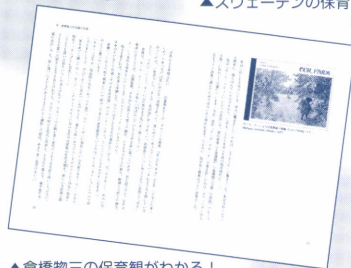
豊かな自然そのものが園庭である北欧の保育。そののびやかな環境は、子どもだけではなく、保護者や保育者にとっても心地よい場所となっています。

本書では、北欧保育と今こそ求められる倉橋惣三やエレン・ケイの保育観を融合した、新しい園のあり方(オアシスとしての園)を提案します。

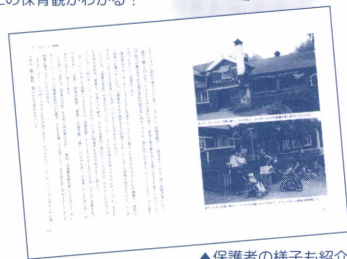
21×15cm 180ページ 定価1,785円(税込)



▲スウェーデンの保育園の様子も写真で掲載



▲倉橋惣三の保育観がわかる！



▲保護者の様子も紹介

プロローグ

- I 北欧を歩いて、北欧を書いて
- II スウェーデンの幼児保育における Nature Orientation
- III 倉橋惣三の田園の思想
- IV 個人差の時代から、個性の時代へ
- V 文部省「保育要領」(1948年3月)に見る保育観
- VI エレン・ケイ散策
- VII 古書会館とのおつきあい・私の文献リスト
- 寄稿
- エピローグ

目次より

キンダーブックの
フレール館

『幼児の教育』の連載企画本

倉橋惣三も編集主幹を務めた『幼児の教育』が、2010年に創刊より109年を迎えた。その中から、連載内容をまとめた企画本もさまざま発刊され続け好評を得ている。

津守との対話から
保育の原点を知る!

新しく生きる

— 津守 真と保育を語る —

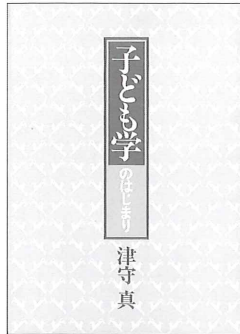
津守 真・浜口順子／編著

『幼児の教育』に連載された津守の論考を受け止め、7名の研究者・保育者たちがそれぞれの子ども・保育理解を浮か彫りにし、津守との対話を試みる。いまなお“新しく生きる”津守の姿から、保育の原点を知る。

21×15cm 230ページ 定価 2,100円 (税込)

2009年12月刊行

10745



子ども学のはじまり

津守 真／著

子ども学の決定版!
20刷 好評発売中!

子どもの行動の見方と研究方法について、著者が長年考えてきたことを論述。保育の原点を示唆し、人間学的保育学のスタート地点を示す。

19×13cm 296ページ 定価 2,100円 (税込)

1979年1月初版

15600

好評発売中



保育の中の 小さなこと大切なこと

守永英子・保育を考える会／著

日々の保育には、見過ごしてしまいうような“小さなこと”の中に、大切なこと“が隠れている。それらを拾い上げて、その意味を知る。

21×15cm 224ページ 定価 1,890円 (税込)

2001年4月初版

36400



子ども100年の エポック

—「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで—
本田和子／著

20世紀、この100年の「子ども観」「子ども—大人関係」の変遷を跡付け、21世紀の「子ども」の新たな可能性を展望する。

20×14cm 280ページ 定価 2,100円 (税込)

2000年4月初版

35700

キンダーブックの

フレーベル館

定価

五五〇円(本体五二四円)☆